

俳句雜誌

空

空

令和3年11月25日発行

第19巻5号

通巻第99号



2021・11

SORA 99号

椿の実

柴田佐知子

青々とうねる灘より小鳥来る

武将みな同じ香に立つ菊人形

猫飼ふに齡が足らず秋の風

案山子翁何まとうても痩せてをり

とぐる解き水のごと去る秋の蛇

ひと雨に万の茸が伸び上がる

月代や脈打つてゐる獣道

石庭に砂の海ある良夜かな

山賊の月の宴なら加はりたし

父は消え母は老いたり椿の実

―「俳壇」十一月号より―

焦れつたき男へ投ぐる櫟の実

鴉の贅歡喜のごとく四肢ひらく

言ひ放つ女ばかりや氷頭膾



福岡 高倉 和子

源はすべてふるさと涼新た

洗ひたての木綿のシャツや夏休み

汀まで連れ戻さるる浮輪の子

ビー玉の入りさうなる蟬の穴

裏庭の同じ場所にて毛虫焼く

線香花火横に並びて始めけり

芝刈りしあとたつぷりと水を撒く

帰省して投げ出してゐる手足かな

東京 中田 みなみ

川崎民家園

秋うらら旧知の如き釣瓶井戸

油屋の看板鴉が与平衡呼ぶ

菊日和掛け売り帳の墨の濃き

框より見上ぐる賞状昼の虫

一つ家に馬との暮し秋夕焼

野舞台の奈落出て遇ふ穴まどひ

秋深いよいよ暮れゆき版画めく

蚕屋閉ぢて桑の大森実をこぼす

長崎 荒井 千佐代

捨て船の名は海彦や夕野分

明日抜く鶏頭の頭を撫でてをり

火の山は濃霧の中や馬刺食ふ

秋収めいとこはとこが赤子連れ

七輪を順番待ちの秋刀魚かな

休まする白を逆さに赤のまま

ちちの舟売らず朽ちゆく草の花

磔の主の釘思ふ鴟の贅

埼玉 服部 早苗

麦秋や明日がいちばん新しき

こだま来てこだまで返すほととぎす

野牡丹や濃く出すぎたる普洱茶

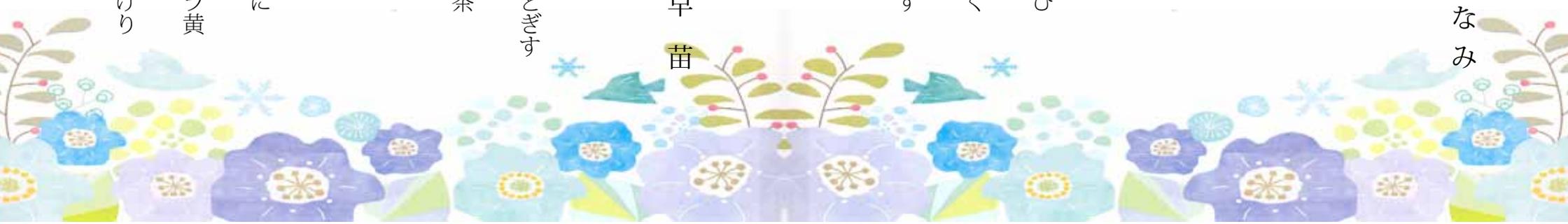
形代にこの身の仔細託すなり

向き探りゐる朝顔の蔓と蔓

短夜を倦み仰向けにうつ伏せに

ひそやかな真夜の交信ガーベラ黄

カップインして蟬声のあふれけり



北九州 深川淑枝

銅鏡の出でし野阜麦の風

石棺の内は丹の色ほととぎす

麦秋や石斧のごとき昼の月

墳山の裾けぶらせて菜殻焼く

青葉木菟金の胸毛に風を抱き

夏ひばり落つや大気の擦過傷

にはとりの目をつむりゐる溽暑かな

青鷺の羽搏きにある骨の音

広島 戸栗末廣

花罌粟や顔にすぐ出る昼の酒

煙草屋の簡単服の娘かな

俺よりも退屈さうな熱帯魚

月下美人ひとりになれば開きたる

親つばめ翼大きく戻りけり

父の家に今も守宮と石臼と

白鷺の見つむる水の暮れぬたり

雲も風も生れ立てなりお花畠

福岡 角野良生

親雀子すずめ馬頭観世音

筍二本すぐに茹でろと置いてゆく

巢燕の総身口となりにけり

植田一望脊振天山揺るぎなし

陽をはじき水をはじきて鮎上る

かたつむり伸びては殻を引き寄する

ゆく蟻に耳打ちしてはもどる蟻

大夕立雷先立てて来たりけり



千葉 原 友 子

睡蓮に平らな水のゆきわたる
 睡蓮のどこも濡らさず咲きにけり
 噴煙にけふの梅雨空のしかかる
 川岸に密生の竹梅雨長し
 蒔きものに畑明け渡す半夏生

大野城 森 田 明 成

産土を揺らしてゐたる牛蛙
 列島に体温超えの暑さかな
 夏草をまき込むやうに列車過ぐ
 板の間に素足投げ出す生家かな
 風入や靴に錆びたる滑り止め

兵庫 林 徹 也

丈あらは松より垂るる蛇の衣
 地下街の出口を塞ぐ大夕立
 盆花の大方妣の庭に剪る
 席ひとつ空く晩学の休暇明け
 待宵や箆笥ひとつの妣の部屋

太宰府 西 住 三 恵 子

もう弾かぬピアノの上のシクラメン
 門徒衆のほどよき集ひ藤の花
 白服をゆるやかに着て旅二日
 独り居に蚊の鳴きたつる夕べかな
 川釣りに手づくりの浮き夏来たる

福岡 栗 原 京 子

天上は仏だらけか蜘蛛の糸
 青芝に伏して勝者の頬ずりす
 返答に窮する問やオキザリス
 島ぢゆうの教会めぐる遅日かな
 餌を欲る猫が網戸へ飛びつくり

熊本 松 田 明 子

氏子らの植樹のあとの山開き
 土均らし神棚据ゑて山開き
 斎竹の撓りどほしや山開き
 麦秋や埋もれてしまふ一里塚
 剥製の多き宿なり夏炉焚く

粕屋 吉 田 菡

葉桜をぬけて仕事の顔となる
 通ひ禰宜みなで迎ふる新樹かな
 形代に家族の数の息かくる
 盛り上がる堆肥を割つて兜虫
 手と足の勝手にうごく盆踊

須恵 苑 実 耶

収穫の寸前の田を猪荒らす
 日脚伸ぶ脇の小屋より山羊の声
 身辺をうろついてゐる風邪の神
 寒紅は戦ひの色出社せり
 埋火や恋の顛末話し出す

東京 山田正子

切岸の人寄せ付けぬ百合の白
 人は皆誰かの遺族鳳仙花
 今映画観てみてふつと炎天を
 太宰忌やきのうの雨に藻の流れ
 湯の町の朧の坂に下駄の音

福岡 三井所美智子

隣田の色濃かりけり植田寒
 絡み蔓くぐり脱ぎゆく蛇の衣
 黒揚羽好きの高さのあるやうな
 暁けの雲薄く広がるアガパンサス
 魂のごと斑猫の失せにけり

直方 曾根富久恵

学校のチャイム聞こゆる風炉点前
 衣紋竹けふのほてりを静めをり
 ジャム瓶に移し目高を呉れにけり
 蝮酒心しづめて封を切る
 夏夕べ夫の背に塗る痒み止め

大阪 井上和子

緑さす国旗に深き畳敷
 飽食の日を麩の舌触り
 茹で汁の濁りを晒す青葉冷え
 ふと動く猫の眼妖し草いきれ
 新しきリユック枕に登山小屋

福岡 あさなが捷

蝌蚪の群うねりて黒き帯となる
 皇后の慎重な歩や夏きざす
 出番まで舞台見てゐる村芝居
 着くづして肌になじみし浴衣かな
 なりひらの手を離したる昼寝覚

直方 石橋幾代

笑ふ顔隠してゐたる団扇かな
 死後のこと記し涼しくなりにけり
 宝物のやうに見てゐる金魚玉
 裸子の顔を真つ赤に泣き止めぬ
 忘れものしてゐるやうな昼寝覚

北九州 田中とし江

朝曇島は石油の備蓄基地
 蝉声の大樹に遠し坊の跡
 帰省の子いつまでも犬撫でてをり
 鰻搔並ぶ大河やとの曇り
 踏み出る竪穴住居日の盛

神奈川 窪みち子

キャンプ村巨き北斗の見下ろしぬ
 キャンプファイア囲む子の背に大き影
 わが影の巨きに怯えキャンプの子
 山の風すらり抜けゆく汗のシャツ
 投げよこす汗まみれなる運動着

長崎

松尾龍之介

夏帯や男は持たぬおくれ髪

雨気招く定家葛の花の数

白服もセピア色なるアルバムよ

ハンモック宇宙旅行も産業に

夏果ての靴よりこぼす島の砂

東京

今井康子

杉玉に残る緑や走り梅雨

半夏生黄味が崩るる目玉焼

ひとり頼めば蜜豆をみな頼む

冷や汗か寝汗か夢を忘れたる

願ふときいつも無力や夏落葉

兵庫

大四乃子

香水の一滴彼を虜にす

汗かきてはがき一枚ポストまで

風死せり緋色の花のまつさかり

仁王像歯をくひしぼる大暑かな

あかがねの空にかはほり乱れとぶ

北海道

押田裕見子

この部屋に蠅は入れぬぞ一撃ぞ

返信は待たず恐れずレース編む

てんと虫我は無力な巨人なり

踝のきりつと締まる藍浴衣

白壁に蛾は美しく留まれり

大宰府

山本則男

一僧のまくなぎ払ふこともなし

棹歌のくぐりゆくなり合歡の花

子蟻螂堅気の貌で生まれ来し

滴りの刹那はひかり持ちにけり

誘ひたる色にあふるる夜店かな

北九州

兒玉充代

軒寄せしだんだら町の大暑かな

夕涼のそぞろ歩きや無一物

すべて為し終へたるごとく夕焼消ゆ

登山靴の音に馴れたる山の禽

鶺鴒の声まるび水辺をかがやかす

福岡

秋津

令

点滴の痣またふえて日雷

配られし団扇の揃ふ盆踊

鉢巻に汗のしみ込む庭師かな

打水や経木に書かれし御品書き

引き波に転がる石や晩夏光

粕屋

秋千

晴

落雷を撥ね返し阿蘇噴火せり

花火の絵箱にあまたの花火買ふ

馬追を見る手囲ひの隙間より

青々と阿蘇の暮れゆく菊脛

湯上がりの肌をさませり虫の声